

〔翻訳：動物倫理の西洋文化 3〕

アンドレーアス・C・ビマー

動物に居場所はない

——人間の公共の場から動物を追放する動きをめぐるエッセイ
(1991)

Andreas C. Bimmer, *Kein Platz für Tiere. Über die allmähliche Verdrängung aus der Öffentlichkeit des Menschen — Ein Essay —*.

In: Mensch und Tier. Kulturwissenschaftliche Aspekte einer Sozialbeziehung.

Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung 27 (1991), S. 195–201.

(No Place for the Animals in the Public Space.

Essay as An Introduction to the Studies of Animal Ethics (1991) by Andreas C. Bimmer)

河 野 眞(訳)

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

パラドックスではあるが、いやおうなく現実となりつつことがらがある。リアルな生き
た動物が人間の公共的な目に見える場所から姿を消すとともに、代用品が、主観のなかで
も客体としても前面に出てきている。印刷であれ、CD など耳にうったえるメディアであ
れ、動物が主人公であったり、人間化された存在であったり、自然に近い形態であつた
り、自由に野山を駆け回っていたり、と、さまざまな形態において、動物がメディアを通
じて再現される度合いはたかまるばかりである。

多種多様な力や利害関心やグループが特に協力したわけでもなく、申し合わせたわけで

もないが、結果的に時とともに力を合わせて、動物を日常生活の場から追い出してしまった。それぞれの立場の代表的な議論は、どれも反駁がむずかしい。実際、誰も一般的に動物を敵と見ているわけではない。むしろ、まったく逆である。わずかに細部での修正は望ましいかもしれないとか、人間の世界にかかわる利害がそれによって危うくなるわけでもないとか、である。たとえば衛生や種の保存、また公共衛生や閑静な環境、それに種々の規則、等々。動物を飼うことも、もちろんその一つで、動物をそばに置くことによって、他の人々の利害を土足でふみにじって禍根を残し、また不愉快の論議の種をつくってしまう。

以下に収録する諸論が扱う問いもこれにかかわっている。すわなち、動物を公共の場から締め出す動きは、どこでどういう形で起きたのか、またそれに伴って生じた趨性がどこであらわになるのか、と。

家畜の時代が終焉を迎えたのは、すでにかなり前のことである。馬は車を牽引するためには使われなくなり、牛もほとんど意味を持っていない。マルティーン・シャルフェが本書に寄稿しているように、公道から馬を締め出す趨性は、すでにモータリゼーションの始まりとともに、したがって20世紀の初頭あたりから不可逆的となっていた。

ドイツの農業では（林業も含めてだが）、機械化の進展は、遅くとも第二次世界大戦の直後あたりから浸透し、それによって牽引のための畜力にとって未来はなくなった。それと相まって、馬の頭数が激減した。馬は、豊かな社会の到来のなかで、スポーツや余暇のためのものになっていった。

今日の農業において有用な家畜は、その大部分が食肉用かミルクの生産のためである。牛、豚、羊、鶏、いずれもそうである。しかしそれらにおいても、正面からは見えなくなる傾向を指摘しなければならない。事業者の数が減少し、少数の飼育企業に集中することにより、作業は一般の目に見えるところから遠ざかってゆく。それには屠殺場も含まれる。EUの農産物価格政策から見ると、ドイツの農業における酪農は（早いか遅いかはともかく）いずれ終末を迎えよう。これを論じている現在でも、不可測の過剰生産を前に公共の議論のなかでは、その危惧があきらかに見てとれる。とは言え、農場から酪農が早晚すがたを消すとか、牛もアヒルもガチョウも馬も山羊も動物園でも識別できず、どれをさわれればその動物なのかも分からなくなるとまで言っているわけではない。

過剰生産に加えて、酪農経営にあたって動物保護の観点から動物種にやさしい飼育がもとめられていること（たとえば子牛の肥育をめぐるスキャンダル）も、この業種の今後の低落につながるものと思われる。収益に重点をおく大量飼育と動物保護のたかまりのあいだの矛盾は解消できず、動物の立場からは、企業的な有用飼育の形態での動物飼育は消滅に向かわざるを得ない。中規模の農業経営の衰微には歯止めがかからず、それは乗馬用の馬の飼育にも影響をおよぼしている。干草や麦藁や強化飼料の手当て、また厩舎や牧草地

の運営が村から姿を消している。個人で酪農をつづけてゆくのは不可能なところまで、条件が変化したのである。

農場での食肉用の動物の飼育のほかに、動物園やサーカスでは、動物が娯楽や教育やたのしみの目的のために公開される。おなじく動物を役立てると言っても、これらは文化的な意味である。しかしこれの施設もまた、激しい実存的な議論にみまわれている。それは、動物園やサーカスにおける動物の役割にはじまり、動物に課せられる課題、また特にその活用と活用の背景にある動物理解が問われている。動物の負担によるサーカスの面白さはもはや時代に合わず、動物をつかった息をのむような大技おおわざも感嘆を呼ばなくなっている。動物にかかわる官庁や保護活動協会、環境保護団体、さらに緑の党の政治家たちは、動物なきサーカスを絶えず熱っぽく説いている。

動物園についても事態はほぼ同じである。と言っても、もちろん動物の代わりに人間を展示せよと言うわけではない。——中心は、猛獣や野生動物の権利を考慮した扱いについてである。動物を籠の鳥さながら檻に一生とじこめておくことが許容されるのか、檻を少々大きめにしたところで、監獄と似たような条件ではないか、といった問題提起である。この種の議論は、当初、エキゾチックな動物や野生動物、それに固有種に限られていたが、過度的な便法にすぎなかった。ここでもまた、〈鳥籠論〉の議論の輪は広がっていったのである。

大勢の人々の努力の賜物には違いなく、またサーカスにも部分的にはあてはまるのは、動物の日の制定であろう。まだそれほど時間が経ってはいないものの、これもまた問題がありそうである。大多数の動物園は公共的な支援で成りたっているため、動物に対する見方の変化をもろにかぶることになり、注文や課題は増えるばかりで、しかものがれる術すべはない。動物の生存の権利が政治的にも優先的なテーマとなってくると、早晩、動物園が縮小されるかもしれない。

動物園やサーカスを拒否する立場がそれはそれでまっとうであり、また時宜に適っていることは別にして、動物が抑圧されている公共の場はほかにもある。

端折って言えば、ある種の動物は自発的に人間の世界に棲むようになった。しかし野生ではなく、本来とは異なった、すなわち人間によって形成された環境のなかで生きている。種々の野鳥、スズメ、ツバメ、鳩、それに（決して歓迎される種類ではない）家鼠、野鼠などである。時には、猛禽類、野兎いたち、鼯ももおり、また家畜が野生化したものもいる。野犬や野良猫で、人間の住空間にあってゴミ捨て場で餌をあさっている。

一般的には、人間は、これらの動物が近くにいることを喜ばない。まったく逆で、何と言っても汚く、病気を移したり、害になったりするそうした住人を追い払う。これらの動物の多くは隠れて住んでいるが、なかにはデモンストレーションしながら公共の場に姿を見せることによって、誰もが知っている種類もある。鳩やスズメである。人なつこく、ま

た愛されている生き物ほど、都市の美観を担当する官庁によって激しく排斥される。それらが群れをなし、排泄物によって、たとえば歴史的な建造物に甚大な被害をあたえるからである。公共衛生がおびやかされることへの断固たる対策としては、餌をやることが禁じられ、薬物によって駆除されるのが一般的である。

そうした対策をどうみるかはともかく、近年あきらかなのは、人間が、動物を日常生活の空間から追い払うためにあらゆる手立てを講じていることである。鳩は平和のシンボルとして歌にうたわれ、町でも公園でも絵に描かれてきたが、今では、それも過去の記憶と化している。

その他の見かけることが少ない生き物、コウノトリやハヤブサは生息地に人家ができたり建築の種類が変わったりした影響で姿を消した。

まったく異なるのは、いわゆるペットであろう。それらが公共の場から早晩いなくなるという予測もあるが、ほとんど実感は得られない。むしろ、毎年の統計は事態が逆であることを示している。ドイツの家庭には、何百万匹という犬、猫、小鳥、熱帯魚、ハムスター、リス、ハツカネズミ、家ネズミ、爬虫類が飼われている。ペットフードやペットにかかわるビジネスは収益の多いマーケットを得ており、今も、特に低下の兆しを見せてはいない。しかし、である。筆者の重点は、公共の場でのあり方であり、プライベートなドアの向こうの動物はひとまず横においている。そこから見ると、公共の場で見かけるペットは、(アウトサイダーを気取る若者たちがエキゾチックな生き物やネズミを連れ歩いていることなどはさておくと) ほぼ犬と猫にかぎられる。この猫と、特に犬については、近年、議論がかまびすしいが、これについては後にふれよう。ペットの飼育がかくも好まれ、エモーショナルに、また強い思い入れがこめられるのは、なぜであろうか、しかもペットを飼育すると、飼い主の自由は大幅に制限され、経費はかかり、ほかにも種々の不快をしのばねばならない。これについて学術的な考察は意外に少ない。どこに利点があり、何が推進力であり、なにゆえかくも魅力があるのか。これらについては、たしかに種々の分野から推測や観測や理論が呈示されてはいる。しかし決め手になるような研究は存在しない。

しかし先ずは、公共の場でのペットとしての犬と猫にもどろう。これらは、昨今、各方面の陣営からの集中砲火にさらされてきた。そこであきらかになるのは、社会的規準がそこなわれていることで、それがプライベートなペット飼育がどうしても公共性とかかわる部分では規制が強められる一方という事態となつてあらわれる。本質は危険の予防で、ペットとその飼い主が引き起こす単純な迷惑行為から身体や生活がおびやかされることにまでまがっている。

具体的に言えば、ある種のペットについて、飼い主と〈他者〉のあいだの確執をあげることができる。後者は、公共の議論の場に登場して、ルールづくりや規制の貫徹に成功す

る。

人間に対して被害をあたえ健康を損なわせる種類の伝統的な食物ライヴァルとして昔から問題になってきた害獣・害虫もいる。野鼠、家ネズミ、ゴキブリ、蚤、南京虫、それに蟻も人間のまぢかにやって来る場合はそこにふくめられる。これらとの戦いには長い歴史がある。フォルクスクンデ（民俗学）の分野でも多くの記録が残されてきた。また果てしなくつづく諸々の形態、たとえば駆除の対策や化学的な薬剤といった物質的なかたちをもとった。罠を仕掛けたり、殺鼠剤を忍ぶのは市民の義務であり、抗えば罰せられかねない。もっとも、家鼠（野鼠もだが）の方も〈殺されてたまるか〉とばかり、生き残り戦術を立てたと言うべきか、人間世界に隠れ家をつくって人間側のコントロールをすりぬけている。そしてこれが、鼠類にある種の不気味な面影をあたえ、無数の神秘的な言い伝えを生み、また強い嫌悪の対象となってきた。恐怖の元凶となることすら珍しくなかった。それは、民間の言い伝えや、愉快的誇張に見られる通りである。たとえば、鼠を怖がって椅子の上に棒立ちになる奥様。

昨今、鳩（実は家バトが野生化したものだが）も、都会の公共の場所に群れをなしており、そのため有害な小動物の仲間に入れられ、駆除の対象になりかねない。もっとも鳩については、ポジティブなイメージが強いため、餌やりの禁止が徹底できない面もある。実際、鳩の粘り気のある糞は汚れだけでなく、病気を広め、さらに建造物の質をも損なう。都市によっては、生殖抑制剤を餌にまぜたり、毒物をもちいたり、その他さまざまな手段で鳩の駆除に成功したところもある。

猫は、勝手に歩き回る動物で、また繁殖力もあって増えつづけるために、公共の場では厄介な存在である度合いがたかまっている。小鳥がねられることもあり、また家庭のゴミ捨て場で餌をあさるために動物の伝染病のもとにもなっている。特に野良猫の場合、飼い猫がかならず受けている予防注射がほどこされていないことが多い。となれば、飼い猫の未来は、基本的には家のなかにかぎられ、ときおり紐を付けて外出する程度になりかねない。

有用動物であれ、ペットであれ、動物による人間の身体への危険については、社会的な対抗措置が成りたっており、またルールや規制や禁止への声も高まっている。当然ながら、それはエキゾチックな猛獣、たとえばライオン、狼その他にあてはまる。これらは、プレステージの意味をになって往来でもときおり見うけられはするが、頑丈な檻に閉じ込められていることが公共の関心と呼び、新聞などでもキャンペーンには熱が入る。同じ動きは大型の蛇や、その他の大型の爬虫類にも言える。また鼠については、毎度のように恐ろしい噂がかたられる。コンクリートに穴をあけるとか、小児を噛み殺す、といったものである。ミツバチについてすら、新聞は、人間への危険を説くのに熱心で、住宅地での養蜂に疑問を投げかけている。

人間の身体と生命への危険では、目下の議論でも、犬、とりわけ大型犬についてかまびすしい。特に大型犬の飼い主の姿勢には、飼い犬を特定の場所に法律で限定することをもとめられても仕方がないものがある。大型犬がやたらに噛みついたり、人間が命にかかわるような重傷を負ったり、といったニュースが後を絶たない。またそれらの犬をつかって不法に闘犬をもよおすことについては、国家の規制をもとめる声はヨーロッパ各国で挙がっている。大型犬（闘犬）をめぐる目下話題になっている措置は、飼育の一般的な禁止のほか、いわゆる飼育免許証、特定の品種に対する高額な飼育税の導入などである。イギリスではその種の犬を絶滅させることも議論されたが、さすがにそれは挫折した。

ドイツの大都会でとられているより穏やかな方法は、大型犬は必ず鎖につなぎ、口輪をはめるというものである。たしかに理にかなった措置で、これによって町なかの集まりでも犬をめぐる問題は切羽詰まったものではなくなった。

プライベートに犬を飼うには、半ば公共的な場が必要になる。猫とちがって、犬は家のなかに閉じこめておくわけにはゆかない。それゆえ犬は、常に公共の場にあらわれるペットでもある。そこからまた、特に糞の始末をめぐる激しい議論が起きている。

これは古くて新しい問題で、またきわめて明白である。靴の裏にくっついて気持ちが悪い思いをした経験は誰もがもっている。近年も、解決のためのさまざまな試みがなされている。たとえば、犬が垂れたものを簡単にあつめることができる、口の部分が紙できた自動回収器である。犬がよごした責任は飼い主が始末しなければならないという観点から、それを条例などによって徹底させようといったものである。しかし実効のある効果はこれまでのところ挙がっていない。むしろ犬の飼い主への圧力が強まる結果、少なくとも都会では犬を飼うのがますます難しくなっている。

これには行政の措置も関係する。そこでは、政治路線では対立する諸政党が不思議なほど一致する。たとえば大都市の一つカッセルでは、SPD と緑の党の連立で、あるいはSPD 単独で、都市部では大型・小型にかかわらず犬に口輪をはめることが決められ、また都心の繁華街では犬を連れ歩くこと自体が制限された。その結果、動きに不自由なために犬を連れて歩く人々、たとえば高齢者が自由に行動できない事態が生じている。しかしそれと並行して、緑の党の政治家たちは、動物保護や種の保全には殊のほか熱心である。たとえばケルンをはじめとする大都会では、特別の区画をもうけて、犬のための広場にあてる実験にも取り組んでいる。

犬のために街路や小路、また公園がよごれるのは、たしかに忽せになし得ない。都会にたまる犬の糞は何トンにもなり、尿も何百リットルにもなるだろう。しかし長期的にみると、犬を飼うのを断念する以外には解決方法はない。行政や、また特に世論が、条例や社会的なコントロールによって、その方向に向かっているのは必然でもある。

もちろん犬の糞は厄介である。それどころか、清潔であるべき公共の場へのあからさま

な挑戦ですらある。それゆえ、はげしい反発を招いている。誰であれ、自分の糞を放置などすれば、皆ながそれを片付ける羽目になるではないか、と言う。

しかし犬や鳩の糞をめぐる、それよりずっと毒性が強く危険でもある自動車の排気ガスをめぐる論議に比べて、はるかに延々と論じられているのは妙な話である。自動車が路上に残す汚れ、たとえばオイルのしみやゴミは、動物の場合ほど社会的な規制を受けない。それが意識され始めたのは、まだほんの数年のことである。公共の清潔が自動車によって侵されることが危害にあたるとは、これまではみなされてはこなかった。自動車による街の汚れも、ほとんど認識されない。

動物によって社会生活の規準がおびやかされるのは、公共の場の汚れだけではない。これまた犬を例にとると、公共空間が静かでなければならないという問題がある。犬が吠え、鶏が啼き、蛙が鳴き声を立てることによる騒音は、しばしば裁判沙汰になってきた。新聞の法廷報道も賑やかであるが、おもしろおかしく証言を深く考えもせず取り上げるだけである。犬の鳴き声も、最初にちょっと一声吠える以上は飼い主が禁じており、またそれがうまくゆかなければ静寂を乱したとして飼い主自身が非難されるのを覚悟しなければならない。こじれた場合、犬を手放すことがもとめられる破目にもなる。

住宅地での動物の鳴き声は、小鳥や猫の場合でも、内々ではすまず、公の場に出ることがあるが、そうなると動物自身はすでに蚊帳の外である。動物の臭気による害も社会規範を乱すことになりかねないが、その他にも、特に動物をしつける時の掛け声は自宅のなかでおこなうこととされており、その点では社会的なコントロールが及んでいる。ここで明らかになるのは、少なくとも公的、すなわち住宅の外部にいると感じられている動物の種類は、ペットとしてより大きなチャンスをもっている。

ついでに言うのだが、民俗学では、これまでペットはほとんど意味をもったことがない。最も大事な主人公である犬と猫ですら、その数の多さと情念的という意味で質においても比重が大きいのに比して、それと中心に扱った研究対象にはほとんどなってこなかった。特に猫は、昔話や伝説や迷信のなかではもはや動物ではないくらいだが、研究は特に少ない。まことに奇妙なことである。民俗研究者で猫を飼ったり可愛がったりしている人が男女とも多数にのぼるだけになおさらそうである。のみならず、特に猫については、癒しをあたえてくれる動物として濃厚な情感と人格的な結びつきが見られるだけに一層その観がある。なお言い添えれば、猫は、住まい、遊び、名付け、画材、種々のコミュニケーションといった諸々の文化形態として現れることが多い。他の、特に統計的にきわだって大きな数値をしめすペットの種類、たとえば魚や小鳥やハムスターやその他の多くの動物についても、民俗学の文献はほとんど存在しない。

広く社会科学の諸分野でも事情は似通っているが、従来、民俗学では、動物は、たとえば習俗研究や口承文藝研究、あるいは道具研究のなかでの端役程度で、周辺的な関心しか

寄せられてこなかった。動物の人間に対する関係の社会文化的な質をめぐる探索もめったに明示されなかった。ちなみに中心に立ったのは農場の動物であったが、それまた民俗学という分野の伝統と照らし合う。繋畜、牽鋤、屠殺、迷信、昔話のなかの狼、動物をめぐるまじない（Tiersegen）等々である。実際、好んで話題にされ、決まってとりあげられてきたのはこの種類の事象であった。

口承や迷信や神秘的な高揚や神話的観念のなかで動物に振りあてられたのは特定の役がらであった。人間の姿をした動物やその逆、それらに、その都度その都度違った能力や特性が仮託され、またすばやく交替もする。それが空想をふくらませ、またそこから現実世界の動物に特定のイメージが加わった。ある種の動物の存在と特徴が不気味と見られるようになったりする。たとえば狼のイメージがそうである。

現実にある種の動物が公共の場から姿を消しつつあるのと反比例して、メディアのなかでは存在の度合いが高まる事態も見受けられる。本や絵画やドキュメント映画や劇映画、さらにラジオ、またとりわけテレビにおけるリアルな出現である。人間の娯楽への欲求や情報への希求のなかで、〈動物〉のテーマは常に場所を占めてきた。どの動物が優先的な位置に立つのかについて一度検証してもよいだろう。逆に、どの種類が注目されないかを問うてもよい。

さらに、ある種の動物はまったくテレビのなかだけの存在であったり、書物でしか見られなくなっている。極端な例では、絶命に瀕したエキゾチックな種である。しかしまた私たちの空間や文化においても、同じ傾向が強まっている。これまで問題にしてきたように、公共の場では動物の居場所がなくなる一方なのである。

ひっそり暮らしていてもめったに姿を見せない疎遠な動物への関心は、同時に多くの神秘的・神話的・平易は空想へと人を駆り立てる。空想には伝統も役立つことがある。それらは娯楽として価値が高く、またイデオロギーの面から重みが加わることもある。

動物学のドキュメントと並行して、メディアのなかで動物に期待される役割は他にもある。文化の口頭伝承のなかではこれまでも呈示されてきたものでもあるが、動物の擬人化である。ラッシーやフーリーといったシリーズものの主人公は、人間の特徴をそなえた動物である。この形態における動物たちが、都会のなかでの実際の飼育において模範的とされるあり方と照応する。吠えたりせず、何かを汚したりせず、誰かに危害をくわえることもない。要するに、文明化された人間として行動する。

とまれ、論議を締めくくりたい。

種の保護の意識が高まり、実際行動も金の掛け方も派手になる一方の時代、すなわち動物保護区や両生類保護柵あるいは鰭脚類への配慮がおこなわれたが、それでいて他の種類の動物は日常生活の場から締め出され、その結果、私たちが都会で目にするのは動物のいない公共空間である。たしかに動物をめぐる心配や動物への気遣いが地歩を占めはした

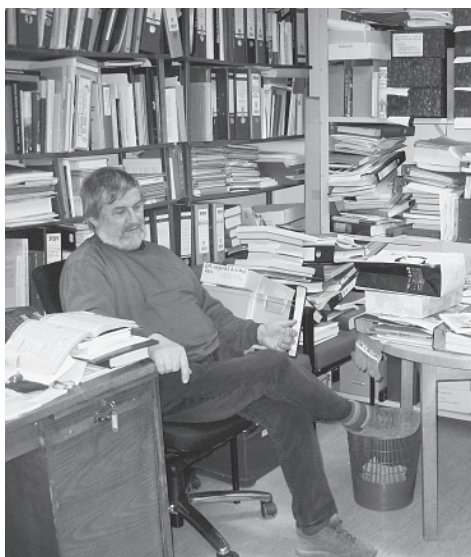
が、それは人間社会の隣りであった。社会の中ではなく隣りでのみ、動物は動物らしく振る舞うことが許容される。

これを特に犬に例をとるなら、都会で飼うのは、私たちの社会における基本的な社会規範に抵触する。公共衛生や静寂や規則や安全に反するのである。

[解説]

本稿はマールブルク大学（ドイツ ヘッセン州）のヨーロッパ・エスノロジー／フォルクスクンデ学科の教授アンドレアス・C・ビマーの論考「動物に居場所はない——人間の公共の場から動物を追放する動きをめぐるエッセイ」の翻訳である。はじめに書誌データを挙げる。

Andreas C. Bimmer, *Kein Platz für Tiere. Über die allmähliche Verdrängung aus der Öffentlichkeit des Menschen — Ein Essay —*. In: Mensch und Tier. Kulturwissenschaftliche Aspekte einer Sozialbeziehung. Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung 27 (1991), S. 195–201.



アンドレアス・C・ビマー教授 マールブルク大学ヨーロッパ・エスノロジー研究所にて
Feb. 2012

アンドレアス・C・ビマーは1943年に生まれ、マールブルク大学へ進んでヨーロッパ・エスノロジー／フォルクスクンデを学んだ。日本の民俗学にあたる研究分野である。当時ここを主宰していたのはインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン（Ingeborg Weber-Kellermann 1918–1993）で、第二次世界大戦後のドイツ民俗学を今日の水準へ発展させて有力な学究の一人である。ビマーはその直接の弟子にあたり、特にヴェーバー＝ケラーマ

ン女史も運営にたずさわった『ヘッセン民衆・文化研究報』(Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung)の編集を主に担当してきた。同誌は1902年に創刊された『ヘッセン民俗学報』(Hessische Blätter für Volkskunde)の後進である(175/76年号から上記のタイトルに変更)。ドイツ民俗学界では他にも有力な地方誌があるが、ヘッセンのそれは中央の機関誌とならぶ水準と総合性をもっている。その編集が、学生指導と共にビマー氏の活動であった。それゆえ毎号、特集を組んで学界に話題を提供してきた。氏の業績もほとんどは同誌の特集に合わせて執筆したものである。「ヘッセンの祭り」のような地元を対象にしたものもあるが、多くは民俗学の新しい領域の開拓や挑戦であり、たとえば「海外移民」、「ノンヴァーバル・カルチャー」、「アルコール」、「民衆生活と軍隊」、「電話」、「子供の日」などがある。1990年代の早い時期に企画された「人間と動物」も民俗研究の分野では当時はまだあまり着手されていなかった(現在でも多いとは言えない)領域との取り組みと言える。この特集からは、先に本誌(愛知大学『文明21』)に、ジークフリート・ベッカー教授の「ミツバチと養蜂が映す西洋社会の自画像——ドイツの事例から見たその変遷」を訳出した。ベッカー氏もまたヴェーバー=ケラーマン女史の弟子で、現在、マールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー／フォルクスクンデ研究所長である。両氏はヴェーバー=ケラーマン教授が育成したマールブルク大学の民俗研究を協力して継承し、共同の企画が多い。なおここに訳出したのは同氏がやはりビマー氏が企画した特集に自らも寄せた一文であるが、タイトルにもあるようにエッセイの体裁である。企画の方向付けという性格においても、また執筆者の持ち味が出ているという意味でも、エッセイの体裁ゆえにマイナスとはならない。

なお言い添えれば、ヴェーバー=ケラーマン教授がそのドイツ民俗学史『ドイツ民俗学——ゲルマニスティクと社会科学の間』の改訂をした際、共同執筆者としたのがビマー氏であった。ヴェーバー=ケラーマン教授の死後、ビマー氏とベッカー教授による第三版が行なわれており、筆者は先年、その日本語訳を刊行した。参照、インゲボルク・ヴェーバー=ケラーマン／アンドレアス・C・ビマー／ジークフリート・ベッカー(著)河野眞(訳)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』文緝堂2011。(原書: Ingeborg Weber-Kellermann, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*. Stuttgart 3. Aufl. 2003)

ビマー氏の業績目録は『ヘッセン民衆・文化研究報』の特集号「習俗と形態: 物質文化への諸事例」が同氏の60歳の記念号として編まれ、そこに書誌データがまとめられている。

Bräuche und Gestalten: Materialien zur Sachkulturforschung: Andreas C. Bimmer zum 60. Geburtstag. Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung für 2004, hrsg. von Andrea C.

Bimmer, Karl Baeumerth und Siefried Becker. 2004.

なお現在ビマー氏は引退してマールブルク郊外で古民家に暮らしつつ地域の文化財の保全活動にあたっている。訳者はビマー氏とは1990年頃から何度か会っており、最近も2012年にその住まいを訪ねた。ちょうど聖体祭の期間で、マールブルク近郊のカトリック教会系のマールドルフ村で行事を見学した帰途、ベッカー教授と共に訪問したのだった。

またここに載せたスナップ写真は、やはり2012年2月に日本の民俗学関係者数人をヘッセン州ヘルプシュタインのファスナハト行事に案内したさいマールブルクに立ち寄ったときのものである。

1. Jan. 2014. S. K.